総括

村尾（ムラオ）　誠一（セイイチ）

毎年この時間になると、本当に寂しさを感じます。二日目を迎えてようやく馴染んできた、世界各地からの文学を研究する仲間が、また散り散りになるわけです。しかし、ここで学んだことや、新たにできた研究者同士の出会いを持ち帰り、さらに発展させていくスタートなのだと考えれば、むしろ心躍る時間なのではないかと思います。

今年のテーマは「書物としての可能性」でした。書物は文学作品が具体化したものですから、それは作品が形成され、「かた」をなすことだと考えられます。ですから、「日本文学がカタチになるまで」という副題を付しました。つまりは、日本の文学作品の形成に関わる様々な問題を包括できる懐の深いテーマだったと思います。個々の発表の中には、必ずしもこのテーマに合致しない形で発想されたものもありましたが、実際このテーマの元で語られてみると、ほぼその全体がこの中に包まれたように思えるのは、テーマの策定に関わった一人の自己満足だけではないと思いますが、いかがだったでしょうか。

振り返って見ますと、第一セッションでは中国文学の影響から日本文学が形成される様が詳細に辿られました。今までにない視点や指摘は貴重だったと思います。

第二セッションでは、『源氏物語』の俗語訳と『蜻蛉日記』の韓国語訳、むしろ原典とは異なった言語秩序の中でのカタチ作りが問われました。カタチになったものが翻訳として新たなカタチになるという問題は重要であり、日本文学の研究会の中でもこの集会こそが議論するにふさわしい場であろうと思います。そして張龍妹さんの日・中・韓、東アジアの視点の中での女流文学の問題、そういう中に置いてみたときの日本の平安朝の女流散文の形成の問題というの

は非常に刺激的でした。その中で、漢字文化圏の仮名や漢字、ハングルなどの文字の問題が提起されました。文字の問題というのは、来年度のテーマを考える委員会の際にも候補の一案となり、大いに議論が盛り上がりました。ところが、いざテーマとして定着させようとして、ワーディングに入った瞬間に皆沈黙してしまい、結局、再来年度以降に考えていただくということになりました。新たに策定したテーマはまた後ほど紹介します。

さて、第三セッションでは、再び中国文学からの影響が辿られました。このセッションでは所謂古典ではなく、明清の比較的新しい世界からの影響が辿られました。また、分野横断的に心学の影響も具体的に辿られて、非常に面白かったと思います。最後のメラニー・トレーデさんからは、神聖なものとして形成されたテクストが時代の変遷の中で美的なカノンとして展開していく様子という、極めて興味深い視点が提示されました。会場が大いに盛り上がりましたから、新鮮な驚きとして皆さんの頭の中に残っていることと思います。

第四セッションに行きますと、「助六の喫煙の型」という身体テクストが分析され、与謝野晶子の『蜻蛉日記』の現代語訳の書物化への過程が原資料の中で辿られるという体験も共有いたしました。そして、エドワード・マックさんの発表では、海外に送られた改造社の円本がNational Literatureの概念形成に関わったという、日本近代文学とは何かを問うための、書物の可能性を通した具体的なアプローチが示されました。

それとともに、設定したテーマへの挑発もあったわけであります。この挑発を二日間の発表の中で和らげて普遍化すればどういうものになるでしょうか。やや予定調和的な総括かもしれませんけれども、翻訳の問題を含めて一度書物のカタチにまで形成された日本文学が、様々な動きをしていき、形になった後も重要な働きをするのだ、ということなのだと思います。いうならば、文学、広い意味での文学的・文化的なテクストというのは、それが当初形成された文化圏を越えて、読み継がれていくというのが、それに備わる誇るべき特質なのではないかと思うわけです。やや予定調和的な総括なので、発表者にとっては

ご意見があるのではないかと思います。

それから最後には、イギリスにいらっしゃる小山騰さんから貴重な講演を聴くことができました。まさに、書物の交流という具体的な問題から始まり、その書物の交流の背後にいる人、それがすなわちイギリスの日本学研究の最初になるわけでありますけれども、その中でアーサー・モリソンに関することは非常に興味深い話であったと思います。モリソンの名前は知っておりましたが、ここまで詳しいプロフィールは全く知りませんでした。モリソンの小説も読んだことがありませんが、これは是非読んでみたいと思います。

さらに、ウェリーに日本語を教えた人が、アンテナの八木修司であったというのも非常な驚きで、理科系の人に教わった日本語というのは、これは面白いなと思いました。イギリスにおけるジャパノロジーの始発ということも、われわれはもっと興味をもって考えていくべきだと思います。ヨーロッパの場合、日本の書籍の流入はこの時代にいろいろあったと思いますので、その背後にある研究的な動きにも、もっと関心を持っていきたいと考える次第です。そういう意味でこの講演は、今回の主題からさらに発展して、海外の文学研究者の基盤に関わる問題となりましょう。

さて、今年からの新たな試みとして、かつてポスターセッションと名乗っていたものを、ショートセッションと名前を変え時間をやや延ばしてみました。さらに、ポスターセッションは、理工系でなされている形で新たに実施してみました。この建物が理工系の研究機関と一緒になっているということがすごく良かったようなのですね。また、総研大という組織が理工系を含んでいて、そういう環境から、資料館のほうから提案されました。

実際、こういう形で実施してみますと、ショートセッションは意欲的な課題が力一杯話された感があり、それぞれ強い印象が残りました。おそらく論文の形にまとまっていくための重要なステップになったのではないかと思います。ポスターセッションは初めての試みでしたが、わかりやすいポスターを掲示し、このセッションならではの、聞き手の反応を直に確認しながら研究を語れると

いうメリットを十分味わっていいただいた発表者もいたと思います。成功例に学んで、恐らく日本の文学関係の学会では他に見たことがございませんので、この集会の名物に育てていかないといけないと思います。

まだまだ話したいことは多いのですが、来年の研究集会に話題を転じましょう。来年は11月26（土）27（日）日に予定しています。テーマは「〈場所〉の記憶――テクストと空間――」としました。場所というのは、例えば作品の舞台と考えても良いでしょう。あるいは、作家を捉えて離さない作家自身のこだわりの場所というのもあるかもしれません。歌枕のような問題ももちろん入ります。場所は実在の場所でなくてもよいのです。場所と空間がどのように違うかということも相当議論したのですが、「場所」というのは二次元で「空間」というのは高さがある、「場所」は面積で認識できるところで、「空間」というのは体積で認識できる所ではないかという意見が出ました。ですから、物理的な家なども空間に入り、様々な事が考えられると思います。

場所は当然、外国でも構いません。また、昨日の委員会では、今までにない展開もしてみたいということになりました。日本にやって来た様々な外国人が日本を描くテクスト、それは、例えばポール・クローデルのフランス語であったり、朝鮮使節使の朝鮮語であったりするわけですが、作業言語と発表言語が日本語であれば、日本の場所に関わる外国語のテクストの研究も歓迎したい、ということです。ですから、そういう発表もあればいいなと思います。

さらに、テクストという言葉を用いたのは、紀行や記録的な文書も当然のことながら、漫画や映画の分析も許容したいということであります。来年のテーマも懐が深く様々な展開が可能です。是非、チャレンジしていただきたいと思います。

来年再び、この場でお会いできますことを祈っております。今年発表された方も、是非聴衆として、特に質問者として、お越しいただけることを期待しております。今回、質問がやや消極的であったという反省がありますので、一度経験された方が質問者としてまた来ていただけるのでしたら、それ以上のこと

はないかと存じます。

それではこれで閉会としたいと思います。本当に遠路の方もいらっしゃいますが、お気を付けてお帰り下さい。二日間どうもありがとうございました。